

7月



園だより

平成29年6月28日
佛教大学附属幼稚園

虫媒花・風媒花・水媒花

園長 藤堂俊英

暖かい季節に咲く花よりも、寒い季節に咲く花の方が長く咲き続けるのは、花粉を媒介してくれる虫が少ないからかもしれない、そんな話を聞いたことがあります。私たちは咲いた花を見て、美しいなあ、可愛いなあ、いい香りがするなあくらいで終わってしまいますが、植物の身になってみれば、開花は虫や風や水の力を借りて自分のいのちのタイムカプセルのような種子を作るための大事業ということになります。子ども大好きだった良寛さんに次のような漢詩があります。「花、心なくして蝶を招き 蝶、心なくして花を尋ぬ 花開くとき蝶来たり 蝶来たるとき花開く 吾れもまた人を知らず 人もまた吾れを知らず 知らずとも帝の則に従う」。花の蜜を求める蝶、花粉を運んでいったり運んできて欲しい花、お互いがお互いの心を熟知しているわけではないのに、それぞれにとっての大事を全うしている。人もまたそのような出会いを通して、それぞれの人生を形づくっている。それは命の世界の大きな道理（天則）ではないか、というのです。石原一輝さんに「うらやましいな」という次のような詩があります。

さいてるはなには ちょうがくる
だまってたってる それだけで あいてのほうから やってくる
うらやましいな すきになってくれる ちょうがいて
みのったタネには かぜがふき
だまってまってる それだけで まいとシタネまき してくれる
うらやましいな いつもしんじている かぜがきて

私たちが自分本位な、人間本位なまなこの曇りを拭い去り、澄んだ無心のまなこで見れば、このいのちの世界はお互いが好きになれるように、お互いが信じあえるように出来ているのに、その本来の姿を見失っているのが人間ではないか。この二人の詩はそのようなことを語りかけているように思います。

幼稚園で子どもたちが仲よく、時には自己主張をして衝突しながらも遊んでいる姿を見ると、それぞれが花となったり蝶となったりしながら成長している姿を想い浮かべます。私たちはそこを子どもたちの傍らに立って、大らかに暖かく辛抱強く見守っていきたいと思います。同じ石原一輝さんに「おかあさんのおつかい」という詩があります。「おかあさんのおつかいは なのはなばたけの ちょうちょに にている あっちのおみせにはいったり こっちのおみせにはいったり とまったり あるいたり ほんとにいそがしい おかあさんのおつかいは みつをあつめる みつばち みたい あっちのおみせではなしたり こっちのおみせではなしたり わらったり はしったり ほんとにいそがしい」

長い夏休みに入ります。どうかお買い物の時だけでなく、子どもたちのためにこそ、大切な花粉を媒介する虫や風や水になってあげてください。